

# 「江戸情緒 深川」 の原点は幕末にあり



# 下町文化

NO. 250  
2010.07.13

発行  
江東区地域振興部  
文化観光課文化財係  
〒135-8383  
江東区東陽4-11-28  
TEL.(03)3647-9819  
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 平成 22 年度深川江戸資料館特別企画展  
「江戸幕末発見伝！」見どころ紹介
- 芭蕉記念館企画展  
「古池伝説と芭蕉庵の再興／  
雪中庵系俳人の芭蕉顕彰活動」
- 江戸の古道をゆく①  
逆井から亀戸浅間神社へ
- 江戸歴史紀行  
幕末期の大名屋敷  
～区外史料調査を踏まえて～
- 江戸今昔 (9)
- 困炉裏ばた (旧大石家日記) ⑩

大河ドラマ「龍馬伝」で語られている幕末維新期、江東区域ではどのようなドラマが生まれていたのでしょうか。今回の展示で、それを是非感じ取っていただければと思います。

また、天保年間(1830～1844)以降、度重なる異国船来航に備え、本所・深川地域では、大砲製造や砲術訓練が行われ、特に越中島はその拠点として位置づけられています。

江戸時代の江東区域には、長州・土佐藩をはじめ、各藩の大名屋敷が配置されていました。特に隅田川東岸にある深川は、大名や問屋の蔵が集中し、「江戸の倉庫」として物資が集まるとともに、江戸市中でも特筆すべき独特の文化や風俗を持った地域でした。

平成21年7月より、大規模修繕のため、長い間休館していた深川江戸資料館が、7月24日より再オープンすることになりました。その再オープンにあわせて、幕末維新期の江東地域にスポットをあてた、特別企画展「江戸幕末発見伝！」を開催いたします。

## 江戸幕末 発見伝！ 開催

7月24日(土)～8月15日(日)

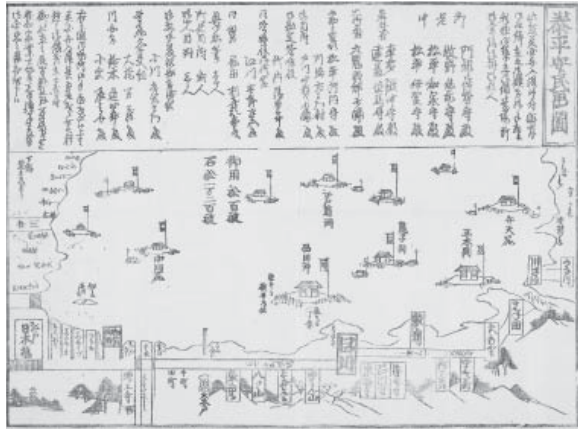
平成21年7月より、大規模修繕のため、長い間休館していた深川江戸資料館が、7月24日より再オープンすることになりました。その再オープンにあわせて、幕末維新期の江東地域にスポットをあてた、特別企画展「江戸幕末発見伝！」を開催いたします。

# 平成22年度深川江戸資料館特別企画展

## 江東幕末発見伝！ 見どころ

### I 開港前夜の江東地域

18世紀頃から、イギリスやフランスといった国々は新たな領土を求めて、東南アジアを目指し、インドなどの国々が植民地化されていきました。19世紀に入ると、東アジアにもその脅威が迫ってくることとなりました。天保11年（1840）にイギリスと清との間で引き起こされたアヘン戦争は、2年間の交戦の末、清の敗北に終わります。この敗戦によって、清は多大な賠



泰平安民画図（中川船番所資料館蔵）

償金の支払いや不平等条約を押しつけられました。

江戸幕府は清国の敗戦を重要視し、海岸防備体制のあり方を改めます。富津岬から観音崎にかけて防衛線を敷き、房総半島や江戸内海の防備を強化していきます。また、江戸にあった各藩の大名屋敷では、大砲製造や砲術訓練が行われました。

このコーナーでは、19世紀に入ってから日本が置かれていた状況を紹介します。ともに、江東区域にあった大名屋敷における海防対策についてみていきます。

### II 軍事拠点越中島の成立

越中島は、江戸時代の初期に島状の土地に榊原越中守が屋敷を持っていたことから名付けられた地名で、『御府内備考』によれば、正徳元年（1711）には町人が土地を拝領したとされています。

この地域が海防拠点として注目されたのは、アヘン戦争の後であり、幕府の命令によって町人地を召し上げて、



絵本江戸土産 越中島（中川船番所資料館蔵）

武蔵国忍藩の中屋敷としました。忍藩では、この中屋敷で軍事訓練を行っていました。その後、越中島は幕府の訓練場となり、江戸防衛の最前線として認識されていきます。

明治維新を迎えると、幕府の訓練場は新政府の陸軍練兵場となり、しばしば明治天皇の観閲を受けることとなりました。その後、明治35年（1902）に京橋区霊岸島（現中央区）から東京商船学校（現東京海洋大学）が移転します。このコーナーでは、幕末維新期の江東区域の中で特筆すべき歴史を持つ越中島の変遷についてみていきます。

### III 知識層のまじわり

巨大城下町江戸の市中でありなが

ら、隅田川を挟んで東岸に位置する深川は、日本橋や神田といった地域とは異なった性質を持った地域でした。18世紀の中頃から、永代寺の門前町を中心に料理屋や船宿などが点在し、浮世絵や人情本の題材や舞台として深川地域が取り上げられていきます。

また、各藩は藩士の子弟を教育する機関として藩校を設けましたが、江戸屋敷でも同様の傾向をみることができ、江東区域では三河西尾藩や信濃松代藩などが学問や武術を学ぶ場を設けています。一方、武士だけでなく町人や農民もさまざまな目的をもって、市井の剣術道場や蘭学・国学などの塾に入門する者もあらわれました。

「江戸の倉庫」として「ひと」「もの」が集まった深川は、数多くの学者や文化人、いわゆる知識層と呼ばれる人々が活動の場としていました。この中には、幕末維新の激動期を演出する人も少なくありませんでした。このコーナーでは、このような知識層がどのような活動をしていたのかについてみていきます。

### IV 江戸近郊農村の明治維新

江戸市中の様相とは異なり、亀戸・大島・砂町地域は、江戸市中の周辺の近郊農村地帯として位置づけられま



す。一般的に、19世紀に入ると関東周辺の農村では、博徒や無宿者が横行するようになり、治安が悪化したといわれています。江戸幕府は文政10年(1827)に改めて数10ヶ村を一つの単位として大組合・小組合という治安を目的とした行政単位を作り出します。この治安制度の中心にあったのが、関東取締出役(通称「八州廻り」と呼ばれる人々でした。

また、小名木川と中川の交差点にあった中川番所は、寛文6年(1666)に小名木川の隅田川口から移転して以来、城下町江戸東端の「川の関所」として、物資や人の往来を取り締まってきました。この中川番所でも、関東近郊の治安悪化に伴って、警備の強化が行われていきます。

このコーナーでは、江東区や江戸川区に残る村の文書から、江戸近郊農村が幕末維新の激動期をどのように乗り越えていったのかをみるとともに、中川番所の最後についても触れていきます。

## V 明治維新と江東地域

ペリーが来航した安政期以降は、日本各地で地震や天変が相次いで起こります。また、安政開港を主導した井伊直弼が桜田門外の変で、水戸浪士らに

暗殺されるなど、幕府を中心とする政局にも暗雲が立ちこめていきます。

不穏な社会情勢を打開すべく、武士のみならず町人や商人、農民なども新たな時代を作り上げるべく模索してきます。慶応3年(1867)10月、徳川慶喜は大政奉還を行い、薩長の下級武士を中心とする勢力が新たな権力主体として、政治の表舞台に登場してきます。そして、旧幕府軍と新政府軍との間で戊辰戦争が引き起こされ、江戸城は無血開城するものの、上野山や市川あたりでは両軍の戦闘が行われました。



大地震火事略図(中川船番所資料館蔵)

このコーナーでは、幕末から明治維新にかけての江東区域の様子を概観す

るとともに、明治期に起こった「江戸回顧」のムーブメントについても考えていきます。

## 終章「江戸情緒 深川」の誕生

大正15年(1926)に完成した『深川区史』上・下巻は、早稲田大学教授の歴史学者西村真次を中心とした深川区史編纂委員会によって刊行されました。他地域でも自治体史と呼ばれる内容の書籍が作られますが、この『深川区史』はこの自治体史とは一線を画すものとなっています。それは、下巻に「深川情調の研究」という題名が付され、江戸時代の「深川民衆の情緒生活」を明らかにする試みがなされたことです。

「辰巳風」や「きやん」と呼ばれた深

川気質を明らかにしようとしたこの試みは、その後深川を舞台とした文学作品に大きな影響を及ぼしていきます。

また、江東区でも「深川文化」を追求する研究会が設けられました。昭和61年(1986)にオープンした深川江戸資料館は、この深川文化を肌で感じてもらう展示施設として位置づけられています。このコーナーでは、「幕末維新期の深川」がどのように継承されていったのかについてみていきます。

この展示の他に、企画展示室では幕末維新期に江東区域に関わりのあった著名人を紹介する「江東幕末百人伝」を展示するなど、さまざまな視点から幕末維新の江東区域を取り上げていきます。

## 深川江戸資料館一案内図



- 期間** 平成22年7月24日(土)~8月15日(日)
- 観覧時間** 午前9時30分~午後5時  
(4時30分までにお入りください)  
(企画展開催中は無休)
- 入館料** 大人300円・小中学生50円
- 交通** 都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車A3出口徒歩3分  
東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅下車A3出口徒歩3分
- 問合せ** 江東区深川江戸資料館 江東区白河1-3-28  
☎3630-8625
- HPアドレス** <http://www.kcf.or.jp/fukagawa/>

(文化財専門員 龍澤潤)

# 古池伝説と芭蕉庵の再興／ 雪中庵系俳人の芭蕉顕彰活動

平成22年7月1日(木)～12月12日(日)まで

延宝8年(1680)の冬に芭蕉は、門人の杉山杉風の助力により、江戸の日本橋から大川(隅田川)を挟んだ深川の地に移り住みました。あれから今年で三百三十年の月日が経ちました。

そこで芭蕉記念館では、これに併せて「古池伝説芭蕉庵の再興」等の展示を公開しています。

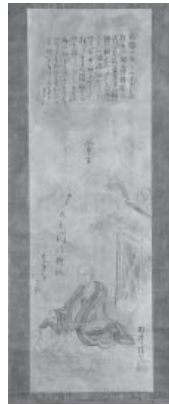
「古池伝説と芭蕉庵の再興」のコーナーでは、芭蕉が深川に移り住んだときに詠んだ俳文「柴の戸」(『続深川集』寛政3年〔1791〕刊)を皮切りに、

「昭和二十一年当時の深川芭蕉庵趾の図」と題した水彩画を展示しています。この作品は、良之助なる人物の昭和三十七年の作で、芭蕉稲荷の後方に



良之助筆「昭和二十一年当時の深川芭蕉庵趾の図」

新大橋が描かれ、当時の様子や相を伝える貴重な風景画です。また、上島鬼貫の芭蕉像(写)は、



「上島鬼貫筆芭蕉像」(写)

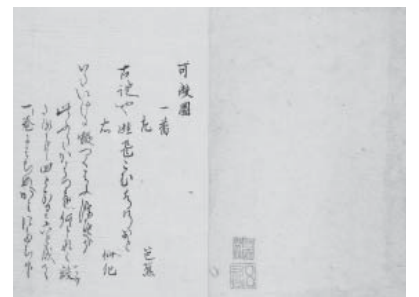
今回が初公開となります。芭蕉の実像を伝える肖像画としては、森川計六が描いたものが広く知られています。この作品はそれをもとに鬼貫が、そして、後世に更に別の人が描いた写しであると思定されます。そのほか、「古池や」の句が所収される『蛙合』(仙化編)の版本や写本、芭蕉と血縁関係にあった天野桃隣の系譜を引く十二世太白堂明月女筆の「古池や」の句幅などの作品が並びます。

「雪中庵系俳人の芭蕉顕彰活動」のコーナーでは、芭蕉記念館の近くの要津寺(墨田区千歳)を拠点とした俳壇

であった服部嵐雪系の雪中庵一門を紹介しています。

雪中庵は、一世嵐雪、二世

世桜井吏登、三世大島蓼太、四世大島完来などと続きます。とりわけ蓼太は、雪中庵隆盛期の俳人で、俳書200種、文台を許した輩は40人、門人3000人とも伝えられています。そして、この蓼太は要津寺に芭蕉庵を再興し、芭蕉の顕彰活動を活発に行ったと言われています。



仙化編『蛙合』(貞享3年)

明治42年(1909)1月号の『ホトトギス』に見える中村不折筆の「再興要津寺芭蕉庵図」は、彼の祖父が残した原図をもとに描かれたものです。従来、この絵は、江東区常盤付近の深川芭蕉庵再興を表したものであると考えられてきましたが、これに類した絵を検討した結果、この場所は要津寺であったことがわかっています。そのほか、完来以後の雪中庵系の俳人である服部梅年、杉浦宇貫、清水東枝などの作品も併せて展示しています。

また、中央の展示コーナーでは、「江戸における芭蕉―その生活と住い―」と題して、「◆江戸下向をめぐる諸説 (I) 桃青寺と芭蕉、(II) 杉風と芭蕉、(III) ト尺と芭蕉」、「◆深川移居以前の生活」、「◆深川移居の年次」、「◆深川芭蕉庵の位置 (I) 第一次芭蕉庵、(II) 第二次芭蕉庵、(III) 第三次芭蕉庵」について、それぞれ資料をもとに取り上げています。

今回の展示は深川芭蕉庵における芭蕉の俳諧活動やその芭蕉を讃える俳壇の活動の事績、そして「芭蕉庵」という生活の拠点を中心に江戸、とりわけ深川における彼の足跡を辿っています。

深川芭蕉庵移居三百三十年という記念の年に、当館の展示を通して、芭蕉の見た深川の地に思いを馳せてみては如何でしょうか。(生島修平)

## 芭蕉記念館

### 開館時間

午前9時30分～午後5時  
(4時30分までにお入りください)

### 展示室休室

第2・4月曜日(祝日の場合は翌日)

### 入館料

大人100円 小中学生50円

### 問合せ

江東区芭蕉記念館  
03(3663)1448  
江東区常盤1-6-3



# 江東の古道をゆく① 逆井から亀戸浅間神社へ

普段、何気なく歩く道、その道がいつごろからあった道なのか、皆さん考えたことがあるでしょうか。街並みの変化とともに、年々、古い道をたどることは難しくなっています。本シリーズは、現在残る江戸時代以来の古道をたどっていきます。

今回は、浅間神社（亀戸9）に残されている道標を手がかりに、古道をたずねてみたいと思います。

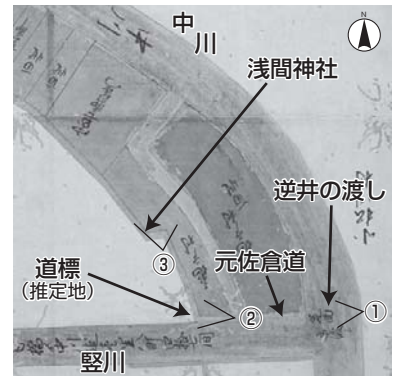
## 浅間神社の道標

道標は、区指定有形民俗文化財で、「富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ道道標」といいます。ちよつと長い名前ですが、正面の刻銘に由来しています。本所六ツ目の地藏講中の人が、享和元年（1801）10月に建てました。



もとは、房総と江戸とを結ぶ元佐倉道と、北

側の浅間神社へ至る道との分岐点にあったと思われる（絵図参照）。また「是より右」から、正面を東に向けて建っていたと考えられます。戦災後の区画整理にともない、昭和29年まで



天明元年（1781）「本所・深川割絵図」（部分）（深川江戸資料館所蔵）  
※丸数字は写真番号に対応

に浅間神社境内に移されました。それでは、道標が案内する浅間神社、亀戸天神、六阿弥陀（常光寺）、そして浅草へと至る、江戸時代の道をたずねてみることにしましょう。

## 逆井の渡しから六ツ目まで

江戸時代、下総方面から中川を越えるには、逆井の渡しを利用しました。明治12年（1879）の架橋により、渡しは廃止されました。現在、昭和43年竣工の逆井橋が架かっています（写真①）。



橋を渡って江東区に入ります。堅川は埋められて公園となり、頭上

には首都高速が走っています。写真②は、道標があった辺りです（亀戸9-13、14）。江戸時代、堅川には六之橋が架かり、両岸は「六之橋」「六ツ目」と呼ばれていました。橋は、延宝の頃（17世紀後半）に撤去されたといわれ（新編武蔵国風土記稿）、道標が建てられた時にはありませんでした。

## 浅間神社へ行く道

道標を見た人は、右手（北方向）に折れる道に入って、浅間神社へ向かったと思われます（絵図参照）。現在、古道の面影はまったくありません。

この辺りは、再開発で景観が一変し、道標が案内する道の大部分は失われました（都市計画図の濃いグレーの部分（現在の道）。ただ、城東社会保険病院西側の道の入り口が、古道と重なっています。この道を進み、交差点を左折して亀戸浅間通りを歩いて行くと神社が見えてきます（写真③）。

亀戸浅間通りは近代の道で、大正6年（1917）12月に開通した城東電車（1917）12月に開通した城東電車が走り、錦糸町と小松川を結んでいました。のち都電25系統となり、昭和43年9月まで市民の足として活躍しました。神社



亀戸・大島・小松川地区第二種市街地再開発事業 計画図2(部分) (東京都)

境内には、そのレールが保存されています。

再開発前には、神社境内地に沿って蛇行する道がありました。絵図を見れば、江戸時代以来の古道であることがわかります。特徴的な道筋の様子は、航空写真（平成7年3月撮影）によりうかがうことができます。

なお道標に見える「富士せんげん」とは、浅間神社の富士塚に由来しています。塚は、区画整理により、現在は隣の公園内にありますが、その位置は変わっていません。（次回へ続く）

（文化財専門員 栗原修）

# 幕末期の大名屋敷

## 区外史料調査を踏まえて

昨年度の区外史料調査は、平成21年8月に深川江戸資料館の再オープンの特展企画展に関連して、高知県高知市にある高知県立坂本龍馬記念館、土佐山内家宝物資料館、高知県立図書館、高知市立市民図書館などで土佐藩江戸屋敷に関連した所在史料調査を行いました。そのうち、坂本龍馬や中浜万次郎に関連した内容については、下町文化前号(249号)「江東区にみる坂本龍馬の痕跡」で紹介した通りです。

今回は、幕末期の江東区域の大名屋敷の実態について、文化人や藩士の交流という視点からみていきたいと思えます。嘉永2年(1849)の『武鑑』によれば、幕末期の江東区域には、【表】のとおり数多くの大名屋敷が所在していました。そのうち、陸奥下手渡藩(現福島県)立花家の上屋敷が「深川高橋」にあるのは別格として、そのほとんどが下屋敷であったことが確認できます。これ以外にも、『武鑑』に記されていない抱屋敷なども存在していたようです。

藩主やその家族が住まうような御殿

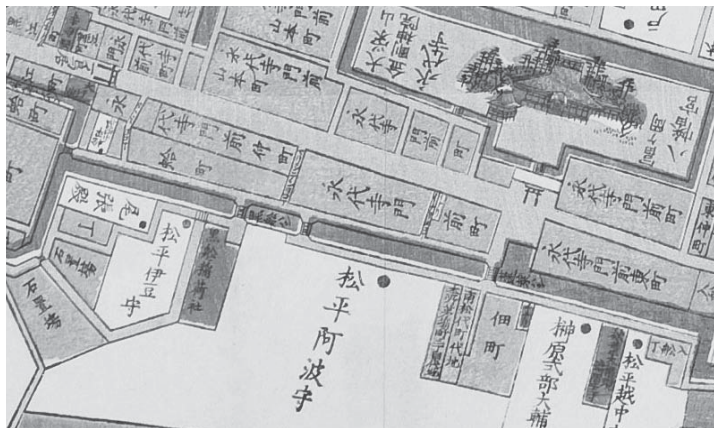
空間を持つ上屋敷とは異なり、下屋敷がどのような利用をされていたのかは、よく分からない部分が多くあります。河川や堀割がはりめぐらされた本所・深川地域の大名屋敷は、水上交通を利用して倉庫機能を持っていたことが想像されます。一方で、小名木川沿いの「ふか川高橋」にあった常陸土浦藩の下屋敷の絵図面(国文学研究資料館所蔵)をみると、川の水を引き入れて回遊式の池を設けるなど、別荘のような利用のされ方も見られるようです。高知県立図書館には宮地文庫と呼ばれる寄贈資料が所蔵されています。この資料群の中に、「江戸日記」と題箋が付された帳面が見られます。この日記は土佐藩の儒者宮地仲枝が、江戸出府に際して、江戸までの行き来や江戸での活動を記したものです。

宮地家は代々土佐藩の儒学者の家柄であり、初代宮地静軒、二代春樹、そして三代仲枝と続いています。この宮地家には、宝永2年(1705)から天保12年(1841)の138年間、父祖3代にわたって記された日記があ

り、これは宮地佐一郎の小説『宮地家三代日記』(昭和45年 光風社)で取り上げられています。

この宮地仲枝が残した「江戸日記」では、天保3年(1832)から4年にかけて、築地にあった中屋敷を活動拠点として、藩内での講義や学者・文人との交流の様相などを窺うことができます。彼の日記には、天保4年2月15日に深川にあった阿波徳島藩の蜂須賀家屋敷を訪れたことが記されています。

その記事によれば、蜂須賀家の黒部文蔵なる人物の案内で、阿波藩の御座



【図1】「本所深川絵図」(部分)

船と御庭を見学したとあります。蜂須賀家は【表】によれば、「深川八まん前」と「本所小名木川」の2カ所に下屋敷を持つていたことが確認できます。この御座船を見学した屋敷は、「深川八まん前」(【図1】)でした。

仲枝は、「深川八まん前」の屋敷(松平阿波守)を出て、洲崎を経由して十間川沿いに歩いて砂村の御鷹野の場所へ向かいます。ここでは、御鷹野の管理をしていた名主勘太郎に案内を受け、麦飯を食べたことが記されています。この御鷹野は土佐藩の砂村屋敷周辺には八右衛門新田、亀高新田などがあり、勘太郎がこの村の名主であったかは不明です。

その後、小名木川沿いにあった蜂須賀家の屋敷にも立ち寄り、庭園を見学します。そして、小名木川を船で渡って、大島村にあった五百羅漢寺、亀戸天神、本所法恩寺前、両国橋を経由して築地の中屋敷に戻っています。

仲枝の遠足に同行した黒部文蔵なる人物はどのような人であったかは不明ですが、「先達」という言葉が付け加えられていることから、仲枝と同じく学者であったことが想像されます。

仲枝は土佐藩の学者谷真潮(たにましろ)に師事して儒学などを学び、その後江戸で髙保



己一の門をたたき、保己一がまとめた大著『群書類従』の手助けをしたといわれています（前掲『宮地家三代日記』）。数度にわたる江戸出府では、幕府や他藩の学者・文人などと接する機会が生まれ、その中で知見を広げました。

次に取り上げるのは、長州藩が砂村新田に持っていた抱屋敷です。この屋敷地は、寛政2年（1790）に砂村新田藤兵衛、平井新田安右衛門から土地を購入したのがその端緒でした（小泉雅弘「近世近代移行期の長州藩毛利家と抱屋敷内神社」『江東区文化財研究紀要』9 平成10年）。この屋敷では、嘉永年間に大砲を製造していたことで知られています（前掲「江東区にみる

坂本龍馬の痕跡」）。

しかし、この屋敷が水戸藩との密談に使われたことはあまり知られていません。毛利家歴史史料編纂所で刊行された『防長回天史』によれば、文久元年（1861）3月27日、長州藩の六戸九郎兵衛、小幡彦七、桂小五郎等と水戸藩の美濃部又五郎、尼子長三郎による密談が砂村屋敷で行われました。

この密約は万延元年（1860）7月、水戸・長州両藩の有志で結ばれた丙辰丸盟約（成破の盟）に連動するものでした。長州藩の軍艦丙辰丸の船上で行われた盟約は、老中安藤信正に対抗し、水戸藩が横浜の外国人居留地を襲撃し、長州藩が事後収拾にとめるといった内容を取り決めたものでした。

文久元年に砂村屋敷で行われた密談では、両藩の交易を進めるべく行われたもので、長州の塩と水戸の大豆を直接取引しようとするものでした。この交易にあたっては、長州藩が製造した「外国形船」を用いることが示されました。しかし、実際の直接交易にあたっては幕府の嫌疑が避けられないのではないかとされ、この密談は終わったようです。

水戸・長州両藩のこの盟約は、長州藩の要職長井雅楽、周布政之助を交え、藩同士の盟約へと繋げようとする意向が見られました。実際には頓挫して終わることとなりました。この会談に砂村屋敷が用いられた理由は定かではありませんが、あくまでも両藩の有志

による会談であったため、目立たない場所で行おうとしたことが推測されます。

藩主や藩要職がいる上・中屋敷とは異なり、米や諸物資の蔵が配置された下屋敷や抱屋敷などでは、このような密談が行いやすかったことが想像されます。特に、大島や砂村地域は農村地域の中に大名屋敷が点在する立地条件であったことも要因の一つに挙げられるでしょう。江東区域にあった大名屋敷は、史料的な制約が多く、具体的なことが分かりません。しかし、数少ない例をたどっていくと、意外と幕末維新の動乱を演出するような事例が見られるのかもしれませんが。

（文化財専門員 龍澤潤）

### 嘉永2年(1849)時点の江東区域の大名屋敷

藩	姓名	別	場所
常陸水戸	徳川慶篤	下	永代新田
常陸新治	松平頼縄	下	小名木沢
美作津山	松平齋民	下	深川海辺大工丁
奥州会津	松平容敬	下	深川高はし
加賀金沢	前田齋泰	下	深川
奥州仙台	伊達慶邦	下	深川
肥後熊本	細川齋護	下	石こだ
因州新田	松平定性	下	本所小名木川
阿波徳島	蜂須賀斎裕	下	本所小名木川
阿波徳島	蜂須賀斎裕	下	深川八まん前
土佐高知	山内豊信	下	深川小名木川
越前丸岡	有馬温純	下	深川清住丁
出羽亀田	岩城隆喜	下	本所五ツ目
武蔵忍	松平忠国	中	深川越中島
越後高田	榊原政恒	下	本所五ツ目
近江膳所	本多康融	下	亀戸
豊前小倉	小笠原忠徹	下	すな村
肥前唐津	小笠原長国	下	深川高はし
下野烏山	大久保忠美	下	深川小名木川
陸奥下手渡	立花鍾之助	上	深川高橋
信濃松代	真田幸孝	下	深川小松丁
武蔵岡部	安部信宝	下	深川富川丁
美濃大垣	戸田氏正	中	深川越中島後
下野宇都宮	戸田忠温	下	深川清すみ丁
上野館林	秋元志朝	下	ふか川
下総佐倉	堀田正篤	下	深川
常陸土浦	土屋寅直	下	ふか川高橋
下総古河	土井利則	下	本所さる江
常陸笠間	牧野貞久	下	本所小名木沢
常陸笠間	牧野貞久	下	深川大和丁
丹後田辺	牧野節成	下	本所さる江
三河吉田	松平信古	下	深川蛤町
上総大多喜	松平正和	下	深川
上野高崎	松平輝聴	下	海辺大工丁
信濃松本	松平光則	下	ふか川
三河西尾	松平乗全	下	深川万年丁
信濃上田	松平忠優	下	深川扇橋
摂津尼崎	松平忠栄	下	深川元番所
信濃高遠	内藤頼寧	下	深川嶋田丁
肥前平戸新田	松浦皓	下	亀戸
常陸下館	石川總定	下	深川小名木川
但馬豊岡	京極孝篤	下	深川海辺新田
常陸下妻	井上正誠	下	本所さる江
下総高岡	井上正和	下	亀戸
下総関宿	久世広周	下	ふか川
和泉岸和田	岡部長和	中	本所小名木川
上野安中	板倉勝明	下	本所五つめ
陸奥福島	板倉勝頭	下	本所さるへ
遠江掛川	太田資功	中	深川高はし
石見津和野	亀井茲監	下	深川八まん前
丹波綾部	九鬼隆都	下	本所五本松
信濃須坂	堀直武	下	亀戸川はた
近江仁正寺	市橋長和	下	本所五つめ
下総生実	森川俊民	下	本所さる江
常陸麻生	新庄直彪	下	深川小名木川

※嘉永2年「武鑑」より作成した。

# 江東今昔(9)

右下の古写真は、昭和30年代末頃に、千石3-1にあった大東京木材株式会社社荷扱所を仙台堀川の対岸から撮影したものです。

大東京木材株式会社では材木を川から陸揚げしてトラックに積み込む仕事をしており、写真は仙台堀川に浮かぶ材木をクレーンで吊り上げているところです。

木場が新木場に移転した後、仙台堀川は公園として整備され、現在は景観が大きく変化しています（左下の写真）。大東京木材株式会社荷扱所は駐車場となっており、古写真でモーターボートが走っている場所には今は遊具があります。仙台堀川の堤防だけが今も昔も変わっていません。



右下の古写真のアングル(現在の地図上にて)

なお、この古写真は加瀬重雄様からご寄贈いただきました。

(文化財専門員 中西 崇)



大東京木材株式会社荷扱所(昭和30年代末)



古写真の場所の現在の様子

## 旧大石家と学校見学

囲炉裏ぼた(旧大石家日記)①

区内最古の茅葺民家で区の指定文化財でもある旧大石家住宅では、区内の小学校が、「昔のくらしを知る」「地域の歴史を調べる」といった学習の一環で見学に訪れます。

土間には、明治のころから盛んになったノリ養殖の道具、良質の水が出る井戸がなかったため、水売りから購入した飲み水を入れておく大きな水ガメなどが展示されています。板の間や座敷にはおひつ・箆筒・長持・柳行李といった生活道具が置いてあります。地域の歴史と旧大石家住宅について説明したあと、展示資料を見て名前や何に使ったものかなど調べてもらいます。旧大石家住宅の中で子ども達に一番人気があるのは何といっても囲炉裏です。「けむた〜い」と言いながらも囲炉裏の周囲に座り暖かさを体感しています。囲炉裏の次に注目を集めるのが屋根裏です。江東地域は江戸時代から水害が多く、この地域の住宅は水害時に避難できるように屋根裏を広く造っており、旧大石家もそのひとつです。屋根裏へ上がる梯子は普段は取り外してあるので、「どうやって上がるの」「見てみたい」という声が聞こえます。

見学を終えてふと気付くと囲炉裏の周りにかわいい足跡がたくさん残っています。土間と座敷を行ったり来たりしているうちに、つい裸足で土間に下りてしまうためです。帰り際に先生から「待った」がっかり、代表者が雑巾がけをしてくれることもあります。こうして歴史ある建造物や文化財を大切にしていく心が芽生えるとうれしいですね。

平成21年度には、小学生のほか、大学生の団体見学も受け入れました。これは建築を専攻する学生さんたちで、旧大石家の柱間を測り、平面図や立面図を描いていく実測実習のためです。将来的に古民家の保存に携わる仕事に就く方が生まれると思うと心強く感じます。100年・200年と時を重ねた古民家を将来に残すには、若い世代の方にも興味を持ち理解を深めてもらうことが不可欠です。見学にきた小学生の中から



生の中から、伝統的建造物を保存し、継承していく若い力がきつと育つことと期待しています。

(文化財主任専門員 向山伸子)